陳舜臣さんを語る会通信

NO.55　Dec.　2021

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2021年12月10日

中国の女のお化けの物語『聊斎志異考(りょうさいしいこう)』

《1.『聊斎志異考』、「考」の意味》

本号では、『聊斎志異考』を取り上げました。初出は、『小説中公』1993年1月号～6月号、8月号～1994年1月号です。

『聊斎志異考』は「考」、つまり、『聊斎志異』についての論考です。翻訳そのものではありません。陳舜臣さんの多くの歴史小説がそうですが、ストーリーの前後途中に陳さんの知識、蘊蓄(うんちく)が語られます。知識欲の旺盛な読者は満足ですが、ストーリーの展開に水を差すことになるのは否めません。

《2. 各話、『聊斎志異考』と原題の比較》

第一話	美しき狐	青鳳
第二話	侠女	侠女
第三話	幽霊なんか こわくない	連瑣
第四話	公孫九娘	公孫九娘
第五話	西湖公主	西湖主
第六話	幽霊塾の人たち	小謝
第七話	阿英という女	阿英
第八話	霍女変幻	霍女
第九話	雲蘿公主	雲蘿公主
第十話	神女	神女
第十一話	黄英とその弟	黄英
第十二話	錦瑟と春燕	錦瑟

（原題は明治書院『中国古典小説選9、10』より）

中央公論社版表紙
装幀・挿画　李庚(りこう)

中央公論社『聊斎志異考』「あとがき」傍線は編集委員の加筆

『聊斎志異』は序文にあたる「自誌」の日付が康熙己未(一六七九)となっているが、刊行されたのは作者の死後五十年もたった乾隆三十一年(一七六六)であった。

作者蒲松齢(ほしょうれい)(一六四〇―一七一五)は、十九歳で院試に首席で合格したが、次の段階の郷試(原則として三年に一度施行)には、なんど挑戦しても及第しなかった。郷試に及第して「挙人」になって、はじめて任官の資格が得られる。士大夫にとって、科挙だけが世に出る道であった時代なので、蒲松齢の落胆ぶりは想像するにあまりあるものがあったはずだ。五十一歳のとき、十一回目の郷試に失敗して、ついに科挙の道を断念してしまう。「自誌」には、この著作は自分にとっては、「孤憤」の書であるとしるされている。

孤憤とは『韓非子』のなかの一篇のタイトルであり、韓非がその故国で認められずに孤立し、憤悶して自分の理想の世界を書きあげたとされている。なんども落第した蒲松齢は、自分が世に容れられないとかんじ、韓非とおなじように自分の世界を、文章で構築しようとしたのであろう。不遇から時代や社会に反感をもった彼は、この世とは別の原理が支配している世界を、妖異界にもとめたにちがいない。

『聊斎志異』に収められた話は、かぞえ方によって異なるが、ほぼ五百話とみてよい。さまざまなテキストがあるが、『青柯亭刻本』一六巻が最も流布している。一九四八年に、作者自筆の稿本が、二百三十七話分発見された。それと照らし合わせてみると、十二巻本の『鋳雪斎抄本』のほうが、蒲松齢の作意に近いようである。

本書は十二巻本から、毎巻一篇ずつえらんだ。選択の基準は、あくまでも私の好みによったものである。私は幼年時代、祖父の本棚から、絵入りの聊斎志異をとり出し、その挿絵をみながら、さまざまな空想にふけった思い出がある。

『聊斎志異』は、中国で刊行された直後に、はやくも日本に伝わったようで、いくつかの物語が翻案された。近代では、芥川龍之介や太宰治の翻案があり、太宰の『清貧譚』は、本書にも収めた「黄英とその弟」に拠っている。(本号4頁参照)

一九九四年三月　六甲山房にて　陳舜臣

同裏表紙　挿画　李庚

補足■『聊斎志異』の「聊斎」は、作者蒲松齢の書斎の名。「志異」は、異(ふしぎ)を志(しる)すという意味。

『聊斎志異考』各話紹介　李庚(りこう)さんの絵が楽しい

話	題	登場人物？	導　　入
第一話	美しき狐	●耿去病(こうきょへい)/耿家当主の甥 ●狐一家/老人・胡義君とその妻、息子・孝児、及び姪・青鳳	太原(山西省)の耿家は宏壮な邸宅をもっていたが、邸に怪異のことがあり、一家は別荘に移り住み、もとの邸には留守番の老人と、怪異譚好きの去病だけが住むこととなる。怪異の正体は狐一家であったが、去病は狐一家の主人の姪・青鳳に一目惚れする。さて…
第二話	侠女	●顧/貧乏生員、25歳。金陵(南京)の人 ●向かいの娘/18、9歳のみめうるわしく凛とした女 ●美少年/実は白狐	この章では、人間の男女がダブル主役で、狐は脇役。顧は書画をかいてその謝礼で、年老いた母親と細々と暮らしていた。そんな顧の家の向かいに老婆と若い娘が引っ越してきた。向かいの娘は、ものを借りに来たり、顧の母と親しく話すようになった。顧の母親は向かいの娘が気に入り、顧と一緒になる話を持ち込んだが不首尾に終わる。娘には、父の仇を討つという大願があったのだ。一方、顧は書画をもとめに来た美少年と、ねんごろになっていた。さて…
第三話	幽霊なんかこわくない	●楊于畏(よううい)/泗水(しすい　山東省)のほとり、近くに古墓がならぶ淋しい場所に住む ●連瑣(れんさ)/幽霊。19歳で世を去り、20年あまりになる	ある夜、塀の外から、詩を吟じる女の声が聞こえてくる。次の夜も同じ二句を繰り返す。三夜目、楊は女の句のあとに七言絶句の後半を自ら作り吟じた。しばし、寂然ののち、楊の部屋に美女が入ってきて、あなたの風雅に惹かれてやってきましたという。この女・連瑣は、書や囲碁が上手で、とりわけ琵琶は名手であった。このあと、楊と幽霊の仲は挿画のように進展するが、そんなとき、連瑣は冥界で役所の使い走りに、妾になれと迫られていた。さて…
第四話	公孫九娘	●生員/莱陽(らいよう　山東省)の人 ●朱生員/生員の旧友。于七の乱で死亡 ●生員の姪/于七の乱で死亡 ●公孫九娘/于七の乱で死亡	于七(うしつ)の乱がおさまって十二年たった康熙十三年(1674)、生員が済南(さいなん　山東省)にやってきた。生員の旧友・朱生員が宿舎にきて、生員の姪と結婚するので仲人になってほしいという。朱生員は生員を姪のところへ連れて行った。そこで、生員は公孫九娘に出会う。公孫九娘は絶世の美女で、生員は一目惚れし、結婚する。さて…。 ■于七の乱/1661年、山東で于七が乱をおこすと、清朝は凄惨な弾圧を加えた。老若男女を問わず、殺しに殺した
第五話	西湖公主	●陳弼教(ちんひつきょう)/燕(河北省)の人、生員。副将軍・賈綰(かわん)の書記 ●西湖の姫(公主)/両親は湖君竜王とその妃(揚江王の娘)	陳弼教が賈綰と共に洞庭湖に泊まったときのことである。賈綰が、湖上で猪婆竜をみつけ、射て捕らえた。陳弼教は惻隠の情をおこし、賈綰にとりなし、傷に薬を塗って、猪婆竜を水中に放してやった。一年あまりたって、燕に帰る途中、またしても洞庭湖を渡ったが、こんどは、大風が吹いて、船は覆ってしまった。辛うじて岸に着き、人家を探しているとき、数十騎の女性を従え猟をする西湖のお姫様に出会う。ところで、姫の母、つまり王妃というのは…。
第六話	幽霊塾の人たち	●陶望三/渭南(いなん　陝西省)の人、生員 ●幽霊美女たち 喬家の秋容/20歳 阮家の小謝/17、8歳 小謝の弟・三郎/15、6歳	渭南の羌という官僚の邸は、鬼魅、物の怪が居着き、主は他へ引っ越し、無住となっていた。鬼や妖怪なんかこわくないという陶望三が、羌に頼み込み、そんな邸に住むことになった。住みはじめると、早速、物の怪の兆しが見えはじめた。やって来たのは二人の美女で、横になっている陶のひげをひねったり、こよりを鼻にさしこんだり、なにかとからかおうとする。ことのはずみで、そんな幽霊たちに、字や経書を教えることに…。

第一話 美しき狐

第三話 幽霊なんかこわくない

第五話 西湖公主

第六話 幽霊塾の人たち

『聊斎志異考』各話紹介(続)

話	題	登場人物?	導　入
第七話	阿英という女	●甘玉、字は璧人。甘珏(かんかく)、字は双璧/廬陵(ろりょう 江西省)甘家の兄弟 ●阿英 ●秦吉了(しんきつりょう)/鸚鵡(おうむ)の一種	これは、人と鸚鵡の婚姻説話である。甘玉が廬山の宿坊に泊まったある夜、窓外から女の声が聞こえてきた。のぞいてみると、数人の美しい娘たちがおしゃべりをしたり、歌を歌ったり、酒宴をしている。突然そこへ、一人の恐ろしげな男が乱入、一人の娘の手に食らいつき、指一本食べてしまった。甘玉は男に切りつけ、娘を救った。甘玉は娘をいたく気に入り、弟の嫁になってほしいというと、娘は、よりふさわしい人・阿英を紹介しますと答える。さて…
第八話	霍女変幻	●霍女(かくじょ)/変化自在の女仙 ●朱大興(しゅだいこう)/彰徳(河南省)の大金持ちで吝嗇。女性には金を惜しまない ●何氏/鄰り村の名門 ●黄生員	霍女は退屈しのぎに、朱大興をたぶらかすことを考えた。毎晩のように女漁りをしている大興に引っ掛かったふりをして、その晩、寝所を共にし、朱家に居ついてしまう。霍女はしたい放題、大興に大散財させ、二年も経つと朱家は傾いてしまう。霍女が次に目をつけたのは鄰り村の何(か)氏であった。何も霍女の虜になり、霍女の贅沢三昧の犠牲になった。霍女の退屈の虫は、こんどは、霍女を善行に向かわせる
第九話	雲蘿公主	●安大業(あんだいぎょう)/盧竜(河北省)の人。たぐいまれな美男子。聡明 ●雲蘿(うんら)公主/天上の宮殿、聖后府に住む ●袁大用/隣り町の書生。安大業の友人	安大業の母親は、「この子は公主をめとる」という夢を見てからというもの、縁談をことごとく断り続けていた。そんなある日、突然、一人の美しい女性が、ふしぎな香りとともに、腰元の肩にすがるようにして、安大業の家に入ってきた。聖后府の「雲蘿公主でございます」といい、やがてこちらに嫁ぐことになるから下見にきたというのである。そして、大金を置き、家の普請をしておいてほしいと言い残して立ち去る。話はまだ、ほんの入口
第十話	神女	●米(べい)某/福建の人、生員 ●神女/米と結ばれる ●顧博士/米の妾	米は、あるとき、ある府城の町を歩いていて、簫(ふえ)や太鼓が鳴り響く大邸宅に引き込まれ、知らない人の誕生祝いに列席する。府城から戻って、市場のあたりを歩いていると、誕生祝いで同席したという男が「飲みに行きませんか」と声を掛けてきた。飲み屋に入ると同郷の鮑荘という男がいて、三人で日暮れまで飲んで、別れた。ところがその帰り、鮑荘が殺されるという事件が起き、米の運命ががらりと変ることに
第十一話	黄英とその弟	●馬子才(ばしさい)/馬家当主 ●陶黄英/菊の精、20歳くらい。絶世の美女 ●陶三郎/菊の精、黄英の弟。17、8歳、美少年	順天府(北京地方)の馬家代々当主は菊を愛してきたが、馬子才の時代になってその菊好きは頂点に達した。ある日、子才は北京にはない菊を求めて金陵(南京地方)まで行った。子才は、首尾良く新種の芽を手に入れた帰路、河北に住居を見つけたいという陶姉弟に出会い、姉弟を我が家に連れ帰る。子才と三郎の会話、「お姉さんはどうして結婚なさらないのです」「時がまだ来ないのです。あと43ヶ月です」。会話の意味は…
第十二話	錦瑟と春燕	●王某/沂水(ぎすい山東省)の貧乏書生。風貌がすっきりして、おしゃれ ●錦瑟/仙人の娘 ●春燕/錦瑟の侍女	土地の富豪の蘭氏は王を気に入り、娘をめあわせた。ところが、娘は、王に魅力を感じず、結婚してまもなく蘭氏が死ぬと、二人の兄と一緒になって、王を、食べ物も仕事も、奴隷のように扱った。あまりの仕打ちに、王は憤然と家を飛び出す。王が死に場所を求めて入った谷に大きな屋敷があり、そこで錦瑟と春燕という二人の美女に出会う。さて…

第七話 阿英という女

第八話 霍女変幻

第十一話 黄英とその弟

第十二話 錦瑟と春燕

太宰治の「清貧譚」（原題「黄英」）を読んでみよう

本号１頁に紹介した『聊斎志異考』「あとがき」、陳舜臣さんの文章に、「**『聊斎志異』は、中国で刊行された直後に、はやくも日本に伝わったようで、いくつかの物語が翻案された。近代では、芥川龍之介や太宰治の翻案があり、太宰の『清貧譚』は、本書にも収めた「黄英とその弟」に拠っている**」とあります。その、太宰治の「清貧譚」の冒頭から、全体の六分の一ほどを下に転載しました。　（編集委員　橘雄三）

清貧譚

太宰治

以下に記すのは、かの聊斎志異の中の一篇である。原文は、千八百三十四字、之を私たちの普通用ゐてゐる四百字詰の原稿用紙に書き写しても、わづかに四枚半くらゐの、極く短い小片に過ぎないのであるが、読んでゐるうちに様々の空想が湧いて出て、優に三十枚前後の好短篇を読了した時と同じくらゐの満酌の感を覚えるのである。私は、この四枚半の小片にまつはる私の様々の空想を、そのまま書いてみたいのである。このやうな仕草が果して創作の本道かどうか、それには議論もある事であらうが、聊斎志異の中の物語は、文学の古典といふよりは、故土の口碑に近いものだと私は思つてゐるので、その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を案配し、かねて自己の感懐を託し以て創作也と読者にすすめても、あながち深い罪にはなるまいと考へられる。私の新体制も、ロマンチシズムの発掘以外には無いやうだ。

むかし江戸、向島あたりに馬山（まやま）才之助といふ、つまらない名前の男が住んでゐた。ひどく貧乏である。三十二歳、独身である。菊の花が好きであつた。住い菊の苗が、どこかに在ると聞けば、どのやうな無理算段をしても、必ず之を買ひ求めた。千里をはばからず、と記されてあるから相当のものである事がわかる。初秋のころ、伊豆の沼津あたりに佳い苗があるといふことを聞いて、たちまち旅装をととのへ、顔色を変へて発足した。箱根の山を越え、沼津に到り、四方八方捜しまはり、やつと一つ、二つの美事な苗を手に入れる事が出来、そいつを宝物（たからもの）のやうに大事に油紙に包んで、にやりと笑つて帰途についた。ふたたび箱根の山を越え、小田原のまちが眼下に展開して来た頃に、ぱかぱかと背後に馬蹄の音が聞えた。

> 「清貧譚」では、ときは江戸時代、ところは、主として江戸、登場人物はもちろん日本人。ストーリーも多少異なります。是非一読を

ゆるい足並（あしなみ）で、その馬蹄の音が、いつまでも自分と同じ間隔を保つたままで、それ以上ちかく迫るでもなし、また遠のきもせず、変らずぱかぱか附いて来る。才之助は、菊の良種を得た事で宇頂天なのだから、そんな馬の足音なぞは気にしない。けれども、小田原を過ぎ二里行き、三里行き、四里行つても、相変らず同じ間隔で、ぱかぱかと馬蹄の音が附いて来る。才之助も、はじめて少し変だと気が附いて、振りかへつて見ると、美しい少年が奇妙に痩せた馬に乗り、自分から十間と離れてゐないところを歩いてゐる。才之助の顔を見て、につと笑つたやうである。知らぬふりをしてゐるのも悪いと思つて、才之助も、ちよつと立ちどまつて笑ひ返した。少年は近寄つて馬から下り、

「いいお天気ですね。」と言つた。

「いいお天気です。」才之助も賛成した。

少年は馬をひいて、そろそろ歩き出した。才之助も、少年と肩をならべて歩いた。よく見ると少年は、武家の育ちでも無いやうであるが、それでも人品は、どこやら典雅で服装も小ざつぱりしてゐる。物腰が、鷹揚である。

「江戸へ、おいでになりますか。」と、ひどく馴れ馴れしい口調で問ひかけて来るので、才之助もそれにつられて気をゆるし、

「はい、江戸へ帰ります。」

「江戸のおかたですね。どちらからのお帰りですか。」旅の話は、きまつてゐる。それからそれと問ひ答へ、つひに才之助は、こんどの旅行の目的全部を語つて聞かせた。少年は急に目を輝かせて、

「さうですか。菊がお好きとは、たのもしい事です。菊に就いては、私にも、いささか心得がありま す。菊は苗の良し悪しよりも、手当の仕方ですよ。」と言つて、自分の栽培の仕方を少し語つた。菊気違ひの才之助は、たちまち熱中して、

「さうですかね。私は、やつぱり苗が良くなくちやいけないと思つてゐるんですが。たとへば、ですね、ー」（以下略）

■このあと、少年の姉が登場し、話は進みます。